

<b>Title</b>	ドイツ語語順の史的研究に向けて
<b>Author</b>	河崎, 靖
<b>Citation</b>	人文研究. 38 卷 1 号, p.137-155.
<b>Issue Date</b>	1986
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	南大路振一教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

# ドイツ語語順の史的研究に向けて

河 崎 靖

## 序

現代ドイツ語の語順（主文=SVO，副文=SOV）は、類型論的観点から大いに注目されている、二種の統語型の文法化である。<sup>1</sup>ドイツ語が他のゲルマン語と違って副文でSOVの語順をとるようになったことの要因は種々の角度から考察されてきたが、これまでに提唱された仮説は大きく見て次の二説にまとめあげることができる。<sup>2</sup>

- ① Delbrück 説：印欧祖語においては動詞は主文でも副文でも文末にあったが、アクセントの関係で後に主文の動詞は第二位へ移行した。
- ② Behaghel 説：印欧祖語での語順は主文でも副文でも定形第二位であったが、ラテン語の影響によって副文で動詞が文尾へ移行した。

本稿では、近年の統語類型論その他の研究の成果を取り入れ上記二説を新しい視点から検討し、ドイツ語の語順を研究するにあたり重要と考えられる諸問題に関して述べる。

## I. 印欧語からドイツ語にかけての語順の研究

1880, 90年代は印欧祖語から現代ドイツ語に至るまでの語順に関する議論が盛んであった。印欧祖語については、次の三説が提出されている。

- Ⓐ 動詞文末位置を最古とする説：この説は Bergaigne, Ries, Wackernagel 等によって主張され、<sup>3</sup>例えば Ries は次のように断定している。

„Im Anschluß an Bergaigne scheint es mir absolut keinem Zweifel mehr zu unterliegen, daß die Stellung des Subjects an der Spitze, des *Verbs am Ende des Satzes*, aller übrigen Satzglieder in ihrer Mitte, wie es als das allgemein indogermanische Wortstellungsschema zu betrachten ist, auch die *Grundlage der germanischen Wortfolge* gebildet hat.“ (Ries 1880: 88)

- Ⓑ 動詞第二位置を通常語順と見做す説：この説は主に Tomanetz, Erd-

mann に代表される。<sup>4</sup> 例えば Erdmann の考え方は次のようなものであった。

„Daß aber die Stellung des Verbuns am Ende des Satzes in allen Fällen als die ursprünglich regelmäßige anzusehen sei, [...], läßt sich aus den erhaltenen deutschen Sprachdenkmälern nicht erweisen. Ich nehme also an, daß sie für den Nebensatz sekundär allmählich entwickelt sei im Gegensatze zu dem Typus I (d. h. Verbum an zweiter Stelle).“ (Erdmann 1886: 193 Fußnote)

㊦語順は完全に自由であったとする説：これは Braune, Hirt, Meillet によって唱えられたもので、<sup>5</sup> 例えば Meillet は、  
“Ainsi l'ordre des mots avait une valeur expressive, et non syntaxique; il relevait de la rhétorique, non de la grammaire.”  
(Meillet 1937<sup>8</sup>: 365)

と述べて、語順は統語的な価値をもっていなかったとしている。

先に挙げた㊦ Delbrück 説、㊧ Behaghel 説は、それぞれ㊦、㊧の考え方に基づいている。

それでは以下、B. Delbrück, O. Behaghel の各説を概観し、検討を加えてみたい。

Delbrück (1878) は、定形後置を印欧祖語の規範として捉え、主文での動詞の第二位への移行については、文の初めは終りよりも強いアクセントがあり主文ではそれが動詞を引き寄せたと推測的に説明している。この考え方は後の J. Wackernagel (1892) の説にも通じている。Wackernagel (1892: 427) は、

„Nun ist es aber ganz unwahrscheinlich, daß die Grundsprache das Verbum im Hauptsatz und im Nebensatz verschieden betont, aber doch in beiden Satzarten gleich gestellt hätte.“

とした上で、

„[...] daß in der Grundsprache das Verbum des Hauptsatzes, weil und insofern es enklitisch war, unmittelbar hinter das erste Wort des Satzes gestellt worden sei.“

と述べている。これは、「enklitisch な要素が文頭から二番目の位置に来る。」<sup>6</sup> という所謂 Wackernagel の法則であり、印欧語の統語論の特徴として明らかにされたほとんど唯一のものである。この Wackernagel の考えをさらに

発展させたものが、Delbrück (1911) *Germanische Syntax, II: Zur Stellung des Verbums* であり、ここでは Delbrück 説が最も詳しく、結論として述べられている。<sup>8</sup> Delbrück は、Wackernagel が主文と副文とで動詞の位置が異なることの原因を調べるために印欧祖語までさかのぼったことは正しいとし、Wackernagel の説に基づきゲルマン語の型とサンスクリットの型とを対応させた (Delbrück 1911: 70-4)。

サンスクリット (散文) には主文に四つの型があり、それらは下の(i)~(iv)である。

(i) S.A.V. : 通常語順 (A.は S., V. 以外の要素)。

(ii) 主語以外のアクセントのある要素

(a) das Verbum

(b) ein Prädikatsnomen

(c) ein Kasus oder Kasuskomplex

が文頭に来る場合。

(iii) 動詞の位置に影響を与えないで接続詞が文頭にある場合 (動詞の位置は文末か接続詞の直後)。

(iv) 相対的定形後置、すなわち Nachtrag<sup>9</sup> が動詞の後に続く場合。

ゲルマン語の通常語順はサンスクリットの(i)に対応するが、動詞は徐々に第二位へ移行した。同様に、(ii)(b)、(ii)(c)に対応する場合もゲルマン語では語順転換が起これ動詞は第二位に移った。また、副文に関しては、S.A.V. の通常語順のルールがゲルマン語においてしっかりと守られた。<sup>10</sup>

Delbrück はサンスクリットの型を本質的には印欧祖語の型と見做しており、つまり、ゲルマン語の型と印欧祖語の型との完全な一致を確立しようとしたのであった。そして最後にゲルマン祖語に関して次のように結論を述べている。

„Das Verbum stand im Hauptsatz habituell am Ende, doch begann schon die Bewegung, durch die es später an die zweite Stelle kam, im Nebensatz verblieb es in der überlieferten Endstellung, weil es unter anderen Tonbedingungen stand als im Hauptsatz.“

(Delbrück 1911: 74)

つまり、Delbrück は、主文の動詞は強いアクセントをもたなかったために本来の文末位置から第二位へ移行したと考えたのである。

次に、ラテン語影響説を初めて唱えた Behaghel, および彼の後その説を



推し進めた F. Maurer, C. Biener の研究の跡を見てみることにする。

Behaghel は Behaghel (1892) で印欧語本来の語順は定形第二位であるという見解を述べ、そしてそれをもとにドイツ語副文の定形後置をラテン語の影響と関連させて考えた。彼はその考え方を一連の論文を経て Behaghel (1923-32) *Deutsche Syntax* でまとめあげた。すなわち、ルネサンス以降の人文主義ラテン語の決定的な影響によりドイツ語は副文の動詞を末尾の方へ移すようになったと彼は考えたのである。<sup>12</sup> 例えば、Behaghel は次のように述べている。

„Seit der späteren mhd. Zeit machen sich in der deutschen Wortstellung erneut Einflüsse des Lateinischen geltend.“ (Behaghel 1932: 17)

確かにこの時期の文献には主文でも定形後置が時々見られるほどである。

(1) zu kainer zyt uns wol *ist*.

「私達は決してよいことはない。」

(Nicolaus von Wyle)

また、方言はラテン語の影響が少ないので古い語法を保つものであるとして次の例を挙げている。

(2) Daß ich heem *kumm* uf Kaarlsruh in mein Bett.

「私がカールスルーエの自宅の自分のベッドに戻ったということ。」

(Max Barack)<sup>13</sup>

このような考え方の背景にあるのは、当時の言語状況である。人文主義時代には社会の上層はラテン語、ドイツ語の両語使用であり、両言語間相互の影響は十分にあり得たのである。<sup>14</sup> Behaghel 自身の言葉を借りれば次のようである。

„Es ist ja bekannt genug, daß Zeitwort im Lateinischen sehr oft am Schlusse des Satzes steht. Aber wenn ich meine alte Schulgrammatik aufschlage, so steht da zu lesen: ‚das Verbum bildet gewöhnlich den Schluß des Satzes.‘ Und das ist zweifellos auch der Eindruck gewesen, den jene Männer des 15. und 16. Jahrhunderts gehabt haben, wenn sie deutsche und lateinische Wortfolge gegeneinander hielten.“ (Behaghel 1900: 246)

続いて、Maurer についてであるが、彼の研究は大部分副文における Hilfsverb (sein, haben) と Partizip の相対的な位置関係についてである。

そこで彼は、14世紀から16世紀にかけての翻訳文献において *qui dixit* は *der hat gesagt* か *der gesagt hat* のいずれかに対応するが、複合時称 *quod dictum est* はかなり規則的に *das gesagt ist* になっていることを見出し、ラテン語の影響が及んでいることを指摘した。また、ラテン語の影響はまず文語へ続いて口語へ及ぶものであるという考えに基づいて、方言ごとの調査を行い、概して方言は副文で定形後置の傾向を示さないことを指摘した。こうした観察から、Maurer はラテン語の影響について次のようにはっきりと明言している。

„Unter lateinischem Einfluß beginnt man im Nebensatz das Verbum finitum ans Ende zu stellen.“ (Maurer 1926: 179)

このような考えの基礎にあるのは、Behaghel の場合と同様、人文主義時代ラテン語に熟達していた人々が定形後置の規則をドイツ語へ移したとする見方である。そして、ラテン語における定形後置という規則については、ラテン語の文法書にそのように規定されているとしている。

„Ich möchte hier die Vermutung aussprechen, daß die lateinische Schulgrammatik des Mittelalters die Endstellung des Verbs im Lateinischen fordert: Ihr folgend setzen diejenigen, die Lateinisch schreiben in jener Zeit des Humanismus, das Verbum finitum ans Ende. [...] Sodann übertragen die lateinisch Geschulten diese Regel auf den deutschen Satzbau.“ (Maurer 1926: 180)

一方、上記二者に対して Biener<sup>15</sup> はラテン語影響説を支持しながらもラテン語への過度の依存に制限を加えた。彼が注目したのは学校教育の規範文法のもつ規範性であった。

„gefördert wird dieses Übergewicht durch lateinischen einfluss (verschiedenes verhalten der umschreibungen mit haben und sein) und später durch die schulgrammatik des 17-18 jh.s, die nur den begriff endstellung kennt.“ (Biener 1926: 255-6)

彼は17世紀から19世紀の学校文法の果たした役割を十分に評価し、定形後置の徹底は理論文法と学校教育の成果であると言っている。

„die durchsetzung der endstellung im nbs. scheint, so weit sie überhaupt zustande gekommen ist, ein verdienst der theoretischen grammatik und der schuldisziplin zu sein, wie sie im 17-19 jh. betrieben wurde. von der regel aus wurde die freiheiten nieder-

gezwungen, die sich die sprache bisher bewahrt hatte.“ (Biener 1922b: 174)

以上、ラテン語影響説を唱えた主要な三人の学者の研究を概観した。

## II. ラテン語影響説の検討

ところで、ドイツ語副文の SOV 語順に関して、印欧語のレベルから見るとではないドイツ語学における語順研究では従来専ら、Behaghel が提唱したように、ラテン語の影響によるものとして捉えられてきた。例えば、今日標準的とされているドイツ語史、A. Bach(1970<sup>9</sup>)にも次のような言明がある。

„Unter der Einwirkung des Lat. ergab sich die Regelung, daß das Verbum an das Ende des Nebensatzes tritt; [...] Im 16./17. Jh. wird dann nicht selten auch im Hauptsatz die lat. Wortstellung nachgeahmt.“ (Bach 1970<sup>9</sup>: 286)

このように広く一般に受け入れられているラテン語影響説に対してこの章で述べようとするのは、史的に観察してみるとラテン語影響説は従来考えられてきたほど強力な説ではないのではないかと、語順の問題を言語接触とか借用とかいった外的要因で説明することは最小限にとどめるべきではないかということである。

さて、ラテン語からドイツ語への影響で最も顕著であるのは語彙の面である。人文主義時代には例えば Text, Professor, Universität といった語がドイツ語に取り入れられた。それでは、果たして文構造の面ではどうであろうかということに関しては、今日までの研究を極めて客観的に見ている P. v. Polenz の次の言葉が非常に示唆的である。

„Wesentlich hintergründiger (und bis heute in der Forschung noch nicht vollständig erkannt) hat das Latein auf den Satzbau und die Stilistik der werdenden dt. Schrift- und Hochsprache eingewirkt.“ (Polenz 1978<sup>9</sup>: 94)

ところで、人文主義時代、ラテン語を範としたイタリアの修辞学、弁論術の理論は、ドイツ語の文法的記述がまだ始められたばかりの時期に、ドイツ語の使用法のための一種の手本と考えられた。そのために、語彙の面にとどまらず、文構造、文体に及ぼしたラテン語の影響は大きなものであった。例えば、次のような分詞構文、不定詞構文は人文主義時代にドイツ語に取り入



れられたものである。

(3) D. Faustus im Bett *legend*, gedachte der Hellen nach.

「ファウスト博士はベッドに横たわりながら、地獄のことを思った。」

(*Doktor Faustus*)

(4) vergas sych selbs vermechelt *sin*.

「自分自身が結婚していることを忘れた。」

(Nicolaus von Wyle)

本稿で扱っている副文という形式についても、ラテン語の手本や学者の文体のもとに微妙なニュアンスの差を示す従属接続詞の体系が作りあげられ、<sup>16</sup>副文の統語論的従属の体系が整然と形成されることとなった。そのような過程を示すものとして、Luther の *Tischreden* の中に次のような主文がドイツ語文で副文がラテン語文というような文例が見られる。

(5) ubi autem non est verbum aut opus, da sol man yhn nit  
wo aber nicht ist das Wort oder die Tat

hallten.

「み言葉とみわざのないところで、神を自分のものとしようと望んではならない。」

(Luther *Tischreden* 257)

さらにこの時期より以前 Mhd. の時代では、文の統語論的従属の可能性は次の文例のように動詞の接続法であったり、und で導かれたりでまだ極めて限られておりかつ自由であった。

(6) Ouch trûwe ich wol, si sî mir holt.

「また私は、彼女が私を愛していると確信している。」

(*Parzival* 607.5)

(7) Ich erkande in wol, unde sæhe ich in.

「彼を見れば、私はきっと彼だとわかるだろう。」

(*Gregorius* 3896)

さらに古く Ahd. の時代には、翻訳において副文構成のラテン語文が並列的な単文の連続によって訳されている場合がしばしばである。このように、形態的な従属性のマーカである従属接続詞の体系はラテン語によって整えられた。それでは、副文に関する語順の規則、つまり定形後置という文法規則も副文形式自体とともにドイツ語に取り入れられたのであろうか。



そもそもラテン語影響説を唱えた研究者（とりわけ Behaghel）の主張は、単にラテン語とドイツ語の語順規則が挙げられているのみで本質的に推測に基づくものであり、言語事実レベルでの議論ではない。実際ラテン語の語順がどのようなものであったか、またそのドイツ語への影響はいかなるものであったかということを見るには、先に文例(5)でも見た、ラテン語、ドイツ語混合の Luther の *Tischreden* という適当な資料がある。その資料の中のラテン語文、ドイツ語文の副文における動詞の位置は多くの場合、次の文例が示すように、それぞれ副文導入詞の直後、文末尾である。

(8) quod *servat* fidem matrimonii, das ist trew vnd ehr.  
das bewahrt das Vertrauen der Ehe

「結婚生活を真実にするもの、それは信頼と貞潔である。」

(Luther *Tischreden* 49)

(9) ob sie schon auch ettlich *hatt*, so sein doch vil grosser virtutes  
die Vorzüge

da gegen.

「彼女にも（欠点は）いくらかあるけれども、むしろ徳の方がずっと大きい。」

(Luther *Tischreden* 49)

この傾向は B. Stolt<sup>17</sup> によるデータによって裏づけられる。

<表1>

	Zweit- stellung	Hauptsatz- folge	Mittel- stellung	End- stellung	Summa
Daß	— —	12 13%	14 15%	65 72%	90 100%
Quod, ut, ne	26 45%	11 19%	6 9%	16 27%	59 100%

この表中のラテン語の *Zweitstellung*（副文導入詞の直後）という位置は、ラテン語の代名詞主語は一般に省略されるという特性を考慮して所謂定形第二位と同じであると見做してよいものである。このように、ラテン語は一般に考えられているようには定形後置を示しておらず、またそれどころかその同じ資料の中でドイツ語はかなりの高率で定形後置を示しているのである。しかも、語順がまだ今日のドイツ語のように統語論的な従属性のマーカで

はなく、副文導入詞という形態論的なマーカーに従属性の表示が大きく依存しているこの時期にあって、ラテン語の副文導入詞に導かれたドイツ語文はたいてい、次の文例のように、ラテン語的な定形第二位の語順をとる。

(10) Ideo in Italia optime fecerunt, ubi sartores haben  
daher in Italien am besten haben gemacht wo die Schneider

eine sunderliche zunfft, die nur hosen machen.

「イタリアでは制度が整えられていて、仕立屋さんについてはズボンだけを作る同業者がある。」

(Luther *Tischreden* 3956)

実際、ラテン語の定形第二位は人文主義時代最も影響力の強かった Melan-  
chthon の文法書の中にはっきりと記述されている。彼は *De Periodis* の章  
の最初のところで次のように述べている。

“Orditur sententiam nominatiuus, aut quod uice nominatiui fungitur.  
Hunc proximè sequitur uerbum finitum, deinde adijcitur obliquus  
alicubi et aduerbia, et attexunt saepè plura nomina praepositiones,  
saepè aut integra commata aut uerba singula coniunctiones.” (Melan-  
chthon)

「主格、または主格と同じ働きをするものが文を始める。これに最も近く  
定動詞がつづき、続いて斜格、副詞がどこかに添えられる、そしてある時  
は前置詞が多くの名詞を編み込み、またある時は接続詞が独立した句や個  
々の動詞を結びつける。」

一方、ルネサンス以降新たに影響力をもち始めたと考えられる古典ラテン語  
は確かに、著者あるいは著作のジャンルにもよるが、通例定形後置である。

18  
<表2>

Cicero *De republica*

	主文	副文
Endstellung	35%	61%

Cato, Cicero, Sallust の平均

	主文	副文
Endstellung	60+%	75%

しかしながら、ここにもやはり揺れがあることが認められ、他言語の統語構  
造にまで影響を及ぼすほどであるとは思われない。古典ラテン語に関しては  
Behaghel 自身自説を補強するために *B.J. Porten* による Cicero のデータ<sup>19</sup>

を引用している。<sup>20</sup>

<表3>

Cicero

	主文	副文
Endstellung	1728	2531
Mittelstellung	1212	1113

ところが、このデータから読み取れるのは、単にラテン語では Endstellung が優勢であるということにすぎない。このような Behaghel のデータの取り扱い方ははなはだ疑問の残るところである。さて、古い時期にはまだ文法書に語順についての詳細な記述はなく著名なラテン文法家 Donat (紀元後4世紀) の著作『文法術』も語順については何も触れておらず修辞学的な言及がわずかにあるのみであるが、彼と並び中世の標準的な文法の規範を与えた Priscian (紀元後6世紀) の文法書にはようやく簡単ではあるが初めての語順規則についての記述が見出される。彼の十八巻の文法書は古典ラテン語についてであり古典作家からの引用も豊富なのであるが、その中で彼は次のような語順規則を述べている。

“[...] sicut igitur apta ordinatione perfecte redditur oratio, sic ordinatione apta traditae sunt a doctissimis artium scriptoribus partes orationes, cum primo loco nomen, secundo verbum posuerunt, quippe cum nulla oratio sine iis complectur, quod licet ostendere a constructione, quae continet paene omnes partes orationis.” (Priscian)

「文頭に名詞が、第二位に動詞が置かれた時、文が正しい語順で完全に語られるように、文体技法に最も通じた書き手によって文成分は正しい語順で文として記された。というのは、もちろん文は名詞や動詞なしでは作り上げられないからである。このことは、ほとんどすべての文成分を結び合わせる文構造から明らかであろう。」

これは、ラテン語は古典期においても必ずしも定形後置が絶対的なものではなかったことを示すものとして大いに注目すべきである。Donat, Priscian が11世紀まで中世の文法を強く規定した後、文法研究はスコラ派の手に委ねられた。彼らは文法の中に思弁的な要素を多く取り込み、文の概念は論理的視点で捉えられた。そこでは動詞は繫辞として捉えられ、定形が中置されることが必然の語順であった。<sup>21</sup> 実際ラテン語の語順は古典期から中世期を経



て人文主義時代に入るにつれ徐々に SOV 優勢から SVO 優勢に変化している<sup>22</sup>のである。上のように、ドイツ語の語順に影響を与えたとされているラテン語側の語順を特に人文主義時代、古典期に関して概観したわけであるが、それではドイツ語側の語順はどのようであったか、ラテン語影響説を唱える研究者の主張する人文主義時代の前後、Mhd. から Fnhd. そして Nhd. に至る時期について調べてみることにする。資料は、Mhd.: *Eine Predigt Bruder Bertholds von Regensburg* (13世紀), Fnhd.: Luther, *An den Christlichen Adel deutscher Nation* (16世紀), Nhd.: Goethe, *Die Leiden des jungen Werthers* (18世紀) で、いずれもオリジナルの散文である。表中の Nicht-Zweitstellung<sup>23</sup> は、Behaghel の用語で *später als an der zweiten Stelle* を意味する。

〈表4〉

	主 文				副 文			
	文頭	第二位	Nicht-Zweitstellung		文頭	第二位	Nicht-Zweitstellung	
			第二位と 文末の間	文末			第二位と 文末の間	文末
Mhd. (13 Jh.) Berthold	8%	91%	0%	1%	0%	12%	21%	67%
Fnhd. (16 Jh.) Luther	15%	76%	2%	7%	0%	17%	26%	57%
Nhd. (18 Jh.) Goethe	10%	85%	0%	5%	0%	2%	7%	91%

〈表4〉からわかるように、動詞の位置に関しては Mhd. から Nhd. にかけてそれほど変化していない。少なくとも散文に関する限りほぼ今日に近い状態が Mhd. に見られる。

以上、この章で見てきたように、ラテン語の定形後置は人文主義時代、古典期において必ずしも絶対的なものではなく、またその影響を受けたとされるドイツ語の語順は人文主義時代前後でそれほど大きな変化はしていない。ここから少なくとも次のような素直な疑問が生じてくる。すなわち、ドイツ語副文の語順に与えたラテン語の影響は今日考えられているような決定的なものではないのではないかということである。

### Ⅲ. ゲルマン語の語順変化

確かに、ドイツ語の中にラテン語の影響が入り込む余地がないわけではなかった。当時のドイツ語文法体系はまだ規範性が付与されていたわけではな



く、単なる史的に積み上げられた流動的なものであった。ここに、Lutherの聖書訳等のドイツ語を基本に Claius, Opitz, Gottsched, Adelung ら文法家<sup>24</sup>によって合理化、統一化の手が加えられたのは、ようやく16世紀から18世紀にかけてのことである。本稿で問題にしている副文の定形後置について言えば、Steinbach (1724), Aichinger (1754) に至って初めてその規則が記述されることになる。<sup>25</sup>

しかしながら、そのようにラテン語の影響という外的な要因に拠るのではなくて、むしろドイツ語内部に本来定形後置の原則が備わっていたとする考え方はできないであろうか。

では、ここで古ゲルマン諸語における語順の様子を見てみよう。

<表5>

主文

	Althochdeutsch (Otfrid) 9Jh.	Altniederdeutsch (Heliand) 9Jh.	Altenglisch (Beowulf) 8Jh.	Gotisch (Wulfila) 4Jh.
SVO	81%	77%	36%	62%
SOV	19%	23%	64%	38%

副文

	Althochdeutsch (Otfrid) 9Jh.	Altniederdeutsch (Heliand) 9Jh.	Altenglisch (Beowulf) 8Jh.	Gotisch (Wulfila) 4Jh.
SVO	35%	50%	44%	71%
SOV	65%	50%	56%	29%

<表5>の示すように、定形後置はドイツ語に限らず古い時期のゲルマン諸語に広く分布している。しかしながら、現代語では英語、北欧語などに定形後置はもはや見られない。このことは、通時的な観察によってよりはっきりとする。すなわち、ルーン銘文には、次の文例に見られるように、SVO, SOV の二種の語順型が在証されるが、

(1)ek hraRaR satido (s)tain(a) [...]

ich setzte den Stein

「私 (HraRaR) がその石を置いた。」

(Stein von Rök 400 A.D.)

(12)ek hlewagastiR holtijaR horna tawido.

ich der Sohn von HoltogastiR das Horn machte

「私 (HlewagastiR, Sohn von HoltogastiR) がその角笛を作った。」

(*Goldhorn von Gallehus*. 400 A.D.)

しかし、次の〈表 6〉のように、北西ゲルマン語で書かれたより古いルーン銘文では動詞は文末に来ることが多く、北ゲルマン語で書かれたより新しいルーン銘文では動詞は文中に現われることが多い。<sup>26</sup>

〈表 6〉

北西ゲルマン語

北ゲルマン語

Mittelstellung	Endstellung
6	22

Mittelstellung	Endstellung
10	3

また、〈表 5〉からもわかるように、一般に古ゲルマン諸語において主文では SVO が、副文では SOV が優勢である。これは、副文では主題化が起こりにくくその言語の古くは無標であった語順が反映されるということ、語順の変化はまず主文に続いて副文にもたらされるということを示している。このことは、例えば次のような事実によっても裏づけられる。すなわち、ゴート語訳聖書（紀元後 4 世紀）はほとんど大部分がギリシア語原典からの逐語訳であるが、副文においていくつかの個所でギリシア語が SVO、ゴート語が SOV となっている。

(13)ἐάν ἀγαπάτέ με, τὰς ἐντολάς τὰς ἐμὰς τηρήσατε.

wenn ihr liebt mich die die Gebote die meine ihr werdet halten

「もしあなたがたが私を愛するならば、私の戒めを守るべきである。」

(Joh. 14, 15)

(14)jabai mik frijoþ, anabusnins meinos fastaid.

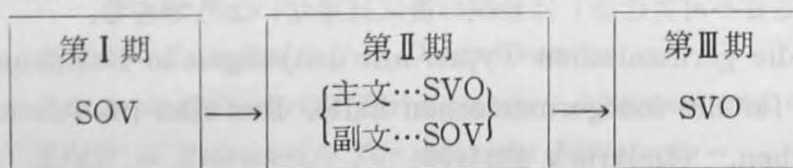
wenn mich ihr liebt die Gebote meine ihr haltet

「同上」

(同上)

ここで見たようなゲルマン語の語順の変化は次の図式のように把握され、現代ドイツ語はその第Ⅱ期にあると見做される。<sup>27</sup>

〈図 1〉



この図式の語順変化は、1960年代以降活発に行われてきた印欧語統語構造に関する類型論的研究により次第に明らかになってきた。その研究によれば、印欧祖語は SOV 型であり、それが後に西側諸語（ヨーロッパ群の諸言語）では SVO 型に変化し、一方東側諸語（ヒッタイト語からアルメニア語までを含むアジア群の諸言語）では元来の SOV 型を保持した。ゲルマン語も西側言語の一つとして変化し今日のような SVO 型になったのであり、I. で見たドイツ語の語順に関して基本的には Delbrück 説が正しいと言える。

## 結び

以上 I ~ III の考察に基づいて考えるならば、ドイツ語副文の SOV 語順は印欧語、ゲルマン語を通じてドイツ語内部に備わっていたのであり、ラテン語の影響というのはその語順規則の定着を推進したにすぎないという見方をすべきであろう。

## 注

- 1 Lehmann (1971), Vennemann (1974)
- 2 Fleischmann (1973), Scaglione (1981)
- 3 Bergaigne (1878), Ries (1880, 1907), Wackernagel (1892)
- 4 Tomanetz (1879), Erdmann (1886)
- 5 格組織の発達した言語の語順は自由であるという考え方。Braune (1894), Hirt (1936), Meillet (1937<sup>8</sup>)
- 6 enklitisch な要素は一音節か二音節の語であるとしている。
- 7 ギリシア語の主文の動詞は Wackernagel の法則の条件をみだが動詞の位置は全く自由であり、例外であると言っている。
- 8 ここに至るまでに Delbrück (1900) では逆の立場を取っている。すなわち、印欧祖語は主文、副文の両方で SVO であったが、アクセントのない、代名詞の O (目的語) が後置されるのを避けるため副文に SOV が導入されたとしている。これは Hermann (1895) の考えによったものと思われる。
- 9 添加語（文構成上、必要不可欠な語）は動詞の後には来ないようである。
- 10 „Ich möchte jetzt die germanischen Typen mit denjenigen in Beziehung setzen, welche ich für die indogermanischen halte. Das sind im wesentlichen die altindischen.“ (Delbrück 1911:70)

- 11 Behaghel (1900, 1929, 1930a, 1930b)
- 12 イタリア語の影響と考えられる場合もあると言っている。
- 13 方言作家 (1832—1901)
- 14 K. Burdach はプラハ宮廷の官庁語について述べ、Behaghel の説に歴史的次元を加えた。
- 15 Behaghel の考え方があまりに一面的であるという批判はFleischmann(1973:42) にも見られる。
- 16 daß はドイツ語本来の従属接続詞である。Vgl. Müller-Frings (1959)
- 17 Stolt (1964: 161)
- 18 Linde (1972) Vgl. Scaglione (1972: 364-6)
- 19 Porten (1922)
- 20 Behaghel (1929: 280)
- 21 Fleischmann (1973: 49)
- 22 Fleischmann (1973: 63), Scaglione (1981: 113)
- 23 Behaghel (1929: 277)
- 24 Claius (1578) *Grammatica germanicae linguae*, Opitz (1624) *Buch von der deutschen Poeterey*, Gottsched (1748) *Deutsche Sprachkunst*, Adelung (1774) *Versuch eines vollständigen grammatisch-kritischen Wörterbuchs der hochdeutschen Mundart*.
- 25 Steinbach (1724) *Ernst Steinbachs kurtze und gründliche Anweisung zur Deutschen Sprache*, Aichinger (1754) *Versuch einer teutschen Sprachlehre*.  
それまでの語順の記述は、名詞と形容詞とか、名詞と前置詞とか語と語の位置関係について述べたものであった。
- 26 Antonsen (1975: 24-5), Smith (1971: 185-6)
- 27 Vennemann(1975: 291)
- 28 Watkins (1964, 1976), Lehmann (1974), Vennemann (1973, 1974, 1975)

### 参 考 文 献

#### Abkürzungen

ASnS = *Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen*

BGdS = *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*  
(Halle/S.)

ZfD = *Zeitschrift für Deutschkunde*

ZfdA = *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur*

ZfdP = *Zeitschrift für deutsche Philologie*



*ZfdU* = *Zeitschrift für deutschen Unterricht*

*ZfvS* = *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung*

*WBZAS* = *Wissenschaftliche Beihefte zur Zeitschrift des Allgemeinen deutschen Sprachvereins*

*Das Ringen* = Hugo Moser (Hg.): *Das Ringen um eine neue deutsche Grammatik*. (Wege der Forschung, 25.) Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1962.

Antonsen, E. H.: *A Concise Grammar of the Older Runic Inscriptions*. Tübingen 1975.

Bach, A.: *Geschichte der deutschen Sprache*. Heidelberg 1970<sup>9</sup>.

Behaghel, O.: „Die neuhochdeutschen Zwillingswörter,“ *Germania*. 23 (1878), S. 257-92.

Behaghel, O.: „Zur deutschen Wortstellung,“ *ZfdU* 6(1892), S. 265-7.

Behaghel, O.: „Zur deutschen Wortstellung,“ *WBZAS* Heft 17/18 (1900), S. 233-51.

Behaghel, O.: *Die deutsche Sprache*. Leipzig-Wien 1917<sup>6</sup>.

Behaghel, O.: „Zur Stellung des Verbs im Germanischen und Indogermanischen,“ *ZfvS* 56(1929), S. 276-87.

Behaghel, O.: „Von deutscher Wortstellung,“ *ZfD* 44(1930a), S. 81-9.

Behaghel, O.: „Zur Wortstellung des Deutschen,“ In: J. T. Hatfield et al. (Hg.): *Curme Volume of Linguistic Studies*. Baltimore 1930b. S. 29-33.

Behaghel, O.: *Deutsche Syntax*. Heidelberg 1923-32.

Bergaigne, A.: „Essai sur la Construction Grammaticale,“ *Mémoire de la Société de Linguistique de Paris*. 3(1878), S. 1-51.

Biener, C.: „Zur Methode der Untersuchungen über deutsche Wortstellung,“ *ZfdA* 59(1922a), S. 127-44.

Biener, C.: „Wie ist die neuhochdeutsche Regel über die Stellung des Verbums entstanden?“ *ZfdA* 59(1922b), S. 165-7.

Biener, C.: „Die Stellung des Verbums im Deutschen,“ *ZfdA* 63(1926), S. 225-56.

Biener, C.: „Veränderungen am deutschen Satzbau im humanistischen Zeitalter,“ *ZfdP* 78(1959), S. 72-82.

Braune, W.: „Zur Lehre von der deutschen Wortstellung,“ *Forschungen zur deutschen Philologie: Festgabe für Rudolf Hildebrand*. Leipzig 1894.

- S. 34-51.
- Delbrück, B.: *Syntaktische Forschungen, III*. Halle/S. 1878.
- Delbrück, B.: *Syntaktische Forschungen, V*. Halle/S. 1888.
- Delbrück, B.: *Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen, I-III*.  
Straßburg 1893-1900.
- Delbrück, B.: *Germanische Syntax, II: Zur Stellung des Verbuns*. Leipzig  
1911.
- Delbrück, B.: *Grundlagen der neuhochdeutschen Satzlehre*. Berlin-Leipzig  
1920.
- Dressler, W.: „Eine textsyntaktische Regel der indogermanischen Wort-  
stellung,“ *ZfvS* 83(1969), S. 1-25.
- Dressler, W.: „Über die Rekonstruktion der indogermanischen Syntax,“  
*ZfvS* 85 (1971), S. 5-22.
- Erdmann, O.: *Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen  
Entwicklung*. Stuttgart 1886-98.
- Fleischmann, K.: *Verbstellung und Relieftheorie*. München 1973.
- Fourquet, J.: „Genetische Betrachtungen über den deutschen Satzbau,“ In:  
W. Besch et al. (Hg.): *Studien zur deutschen Literatur und Sprache  
des Mittelalters. Festschrift für Hugo Moser zum 65. Geburtstag*.  
Berlin 1974. S. 314-23.
- Fries, C.: „On the Development of the Structural Use of Word Order in  
Modern English,“ *Language*, 16(1940), S. 199-208.
- Greenberg, J. H.: „Some Universals of Grammar with Particular Reference  
to the Order of Meaningful Elements,“ In: J. H. Greenberg (Hg.):  
*Universals of Language*. Massachusetts 1966. S. 73-113.
- Helbig, G. und Kempter, F.: *Die uneingeleiteten Nebensätze*. Leipzig 1976.
- Hermann, E.: „Gab es im Indogermanischen Nebensätze?“ *ZfvS* 33(1895),  
S. 481-535.
- Hirt, H.: *Indogermanische Grammatik, V-VII*. Heidelberg 1929-36.
- 小島 公一郎:『ドイツ語史』大学書林 1964。
- 久保田 肇:『独逸文章接合詞の研究』南江堂 1958。
- Lehmann, W. P.: „The Nordic Languages: Lasting Contributions of the Past,“  
In: H. Benediktsson (Hg.): *The Nordic Language and Modern  
Linguistics: Proceeding of the International Congress of Nordic  
and General Linguistics*. Reykjavik 1970. S. 286-305.
- Lehmann, W. P.: „On the Rise of SOV Patterns in New High German,“ In:

- K. G. Schweisthal (Hg.): *Grammatik Kybernetik Kommunikation: Festschrift für Alfred Hoppe*. Bonn 1971. S. 19-24.
- Lehmann, W. P.: *Proto-Indo-European Syntax*. Austin 1974.
- Lehmann, W. P.: „A Shift in the Syntactic Type of Early North Germanic and its Phonological Effects,“ In: J. Weinstock (Hg.): *The Nordic Language and Modern Linguistics*. Austin 3(1978), S. 110-5.
- 松本 克己: 「印欧語における統語構造の変遷——比較・類型論的考察——」『言語研究』68(1975) 15-43ページ。
- Maurer, F.: *Untersuchung über die deutsche Verbstellung in ihrer geschichtlichen Entwicklung*. Heidelberg 1926.
- Meillet, A.: *Introduction à l'Étude Comparative des Langues Indo-Européennes*. Paris 1937<sup>8</sup>.
- Moser, H.: *Deutsche Sprachgeschichte*. Tübingen 1965.
- Müller, G. und Frings, T.: *Die Entstehung der deutschen daß-Sätze*. Berlin 1959.
- Paul, H.: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Halle/S. 1944<sup>14</sup>.
- Polenz, P. v.: *Geschichte der deutschen Sprache*. Berlin 1978<sup>9</sup>.
- Porten, B. J.: *Die Stellungsgesetze des Verbum finitum bei Cicero*. Bonn 1922.
- Ries, J.: *Die Stellung von Subjects und Prädicatsverbum im Héliand*. Straßburg 1880.
- Ries, J.: *Die Wortstellung im Beowulf*. Halle/S. 1907.
- 相良 守峯: 『ドイツ文章論』岩波書店 1950<sup>5</sup>。
- 相良 守峯: 『ドイツ語学概論』研究社 1950。
- Scaglione, A.: *The Classical Theory of Composition, from its Origin to the Present: A Historical Survey*. Chapel Hill 1972.
- Scaglione, A.: *The Theory of German Word Order from the Renaissance to the Present*. Minneapolis 1981.
- Smith, J. R.: *Word Order in the Older Germanic Dialects*. Dissertation. Illinois 1971.
- Stolt, B.: *Die Sprachmischung in Luthers Tischreden*. Uppsala 1964.
- Tomanetz, K.: *Die Relativsätze bei den ahd. Übersetzern des 8. und 9. Jahrhunderts*. Wien 1879.
- Vennemann, T.: „Explanation in Syntax,“ In: J.P. Kimball (Hg.): *Syntax and Semantics, II*. New York 1973. S. 1-50.
- Vennemann, T.: „Topics, Subjects and Word Order: from SXV to SVX via

TVX, "In  
I. Amster  
Vennemann, T.:  
Order an  
Wackernagel, J.  
Indogerm  
Watkins, C.: „F  
Structur  
national  
Watkins, C.: „  
Probleme  
on Dia  
吉田 和彦: 『  
Yoshida, K.: „  
Germa  
S. 315

TVX, "In: J. Anderson und C. Jones (Hg.): *Historical Linguistics*, I. Amsterdam 1974. S. 339-76.

Vennemann, T.: „An Explanation of Drift,“ In C. N. Li (Hg.): *Word Order and Word Order Change*. Austin 1975. S. 269-305.

Wackernagel, J.: „Über ein Gesetz der indogermanischen Wortstellung,“ *Indogermanische Forschungen*. 1(1892), S. 333-436.

Watkins, C.: „Preliminaries to the Reconstruction of Indo-European Sentence Structure,“ In: H. G. Lunt (Hg.): *Proceedings of the 9th International Congress of Linguists*. the Hague 1964. S. 1035-45.

Watkins, C.: „Towards Proto-Indo-European Syntax: Problems and Pseudo-Problems,“ In: S.B. Steever (Hg.): *Papers from the Parasession on Diachronic Syntax*. Chicago 1976. S. 305-26.

吉田 和彦: 「印欧語の統語論研究に向けて」『言語研究』80(1981) 69-95ページ。

Yoshida, K.: „Towards Word Order and Word Order Change in the Older Germanic Languages,“ *Journal of Indo-European Studies*. 10(1982), S. 315-45.